20

明治女医史の基礎的研究 (二)

「女医論」について

三崎裕子

『吉岡弥生伝』によれば、東京女医学校第一回卒業式は、明治四一年、一人の医術開業後期試験合格者、竹内茂代が出たことによって、創立後九年目にしてようやく挙行されたという。その席上、来賓による所謂「女医論争」が巻き起こされたことはつとに知られている。竹内茂代が医術開業試験に合格したのは明治四一年一月、一四三人目の女医の誕生であった。荻野吟子の合格から二四年もの時を経た竹内の卒業式の場ですら、かくも激しい女医論が戦わされていたのであった。

本報告では、明治時代における「女医論」を当時の医学情報誌を中心にできる限り摘記し、その内容と反響などから明治女医のおかれた社会的環境とそれに対する明治女医の行動を考えてみたい。

およそ女医に関する賛否は、女医荻野吟子が現れた当初から存在したものであろうが、それが「論」となって現れるようになったのは、おそらく明治二五年頃であると思われる。これは明治二〇年頃に論壇を賑わせていた婦人改良論、あるいは婦人論とも密接な関係があるが、直接的には明治二四年に一気に八名もの女医が生まれ、また済生学舎の女子学生の存在が注目されてきたことと無縁ではない。

明治二五年二月の『中外医事新報』に、警察医長山根正次の「医師懇話会ニ於テ」という一文が掲載され、そこで山根は女医を激しく排斥しようと論じた。感情的ともいえる山根の論に対し、当時ドイツ留学中であった入澤達吉はヨーロッパに於ける女医の状況を冷静に分析し『中央医事週報』に報告した。医学界の中での「女医論争」の本格的な幕開けであった。ドイツでは入澤の留学当時、女子の医学教育をめぐる議論が盛んに行なわれており、二、三の大学では試験的に聴講生が受け入れられていた。入澤の行なったヨーロッパ各国の女医の状況の比較報告は、まさに当時ドイツの各大学で行なわれてい

たものであった。同紙はその後「女医論」を募集し、ドイツ議会での「女医論」までも掲載している。

当時の医学関係雑誌の中で、女医排斥の急先鋒とでも言えるのが明治二六年に刊行された『医海時報』であった。『医海時報』では、明治二七年十月に「女子の医学研究に就いて」という小文が掲載された。これが同紙の「女医論」に関わる最初のものであるが、そこでは女医と女子医学生は社会の要請で生まれたものではないと断じ、実際の社会一般の評価は女医の増加とともに確定するであろうとしている。同紙が女医に批判的であったことは、その後次々に展開される女医に関する記事や論文にみることができる。

一般紙においては女医に関する記事は多くないが、その評価は必ずしも批判的ではなかったようである。明治二九年の『報知新聞』では「女子の職業」として「女子の医者」を取り上げ、その将来を「我が国にても遅かれ早かれ女医の発達を見るの時来るべし」としている。また当時、次々に刊行されていた女性雑誌においては、女医に関する雑報をかなりの頻度で取り上げ、女性の職業として紹介している。しかし女性雑誌の多くは、「女医論」に積極的に参加することもなく、その論調は明治後半から次第に「良妻賢母主義」に迂回して行き、読者である「中上流婦人」と女医あるいは女子医学生の間の社会的連帯感は、明治末年には次第に希薄になって行くように思われる。

このような雑誌、新聞などにみられる「女医論」からすると、明治女医の社会的環境、評価は、小数の援護者はあったものの非常に厳しいものであった。その中での女医の活動は、ある面でこの社会的環境に制約されたものとなったが、明治の女医達は、この制約の中から従来の医師社会の欠を補う役割をまず担い、そして次のステップへと歩を進めて行ったのであった。

（所沢市）